

山口の地から、 新たな知の創造に挑む

「時間とは何か―」2000年に設立された山口大学時間学研究所は、従来の学問の枠を超え、新たな学問領域である「時間学」の創造を目指す研究所です。あらゆる事象とかわり、豊かな可能性を持つ「時間」というテーマは、多様な研究者をひきつけています。今から約500年前、宣教師フランシスコ・サビエルが献上品として日本に初めて機械時計をもたらした山口の地から、新たな知を創造しようとする取り組みを紹介します。

時間学研究所が目指すもの

時間学研究所は、岩国市出身で国際的に著名な数学者、広中平祐氏が学長を務めていた2000年4月、時間学の創造を大きな目的に掲げて設立されました。そのために文系、理系という壁を取り払って研究を行う体制を構築し、研究成果を広く社会に還元することを目指しています。

現在は藤澤健太所長以下専任所員6人、兼務所員などを含めて44人体制となっており、宇宙地球科学、生命科学、心理学、人文学など7部門を設けて分野の枠を超えた研究を進めています。

研究所の礎となった時間生物学

時間学研究所設立の背景には、国立大学で初めて山口大学に誕生した時間生物学講座の存在があります。この講座を率いた千葉喜彦氏は、日本時間生物学会の初代会長を務めました。千葉氏の退職後に赴任した井上慎一氏は、「視交叉上核」が体内時計の司令塔であることを発見し、時間学研究所の初代所長を務めた人物です。広中氏は、時間生物学を基に、生物学に限定しない時間の研究を進める「時間学研究所」を構想し、実現したのです。

難しく壮大な問題に挑む

新たな学問の構築は、定まった方法論があるわけではなく、長い時間を要します。時間学研究所はこれまでに、

研究者が自身の専門分野について紹介する研究セミナーや、様々な研究分野の人が一つのテーマに取り組む研究プロジェクト、所員を対象にした時間学勉強会などを展開。研究成果を収めたシリーズ書籍「時間学の構築」の出版を進め、全8巻のうちこれまでに4巻を世に送り出しました。3年後をめどに、時間学の学問体系を網羅した教科書をつくり、学生を対象に講義を始める計画です。藤澤所長は「今は時間学構築の最初の一步のところにいる」と、現状を冷静に分析しています。

天文学と時間学

あらゆる事象と関係する時間の多様性を示すように、研究所では実にさまざまな分野の研究に取り組んでいます。藤澤所長が専門とする天文学は、本をただせば暦を作ることを目的に出発した学問です。現在の天文学と時間学の関わりでいうと、天体が時間とともにどのように変化するかに着目した「時間領域天文学」が注目を集めていることが挙げられます。山口大学では、山口市仁保にある電波望遠鏡を長時間にわたって独占的に使用できる恵まれた研究環境があります。藤澤所長の研究室では、この環境を生かし、天体に生じる短時間の変化を丹念に観測しています。星が生まれる時に発生する電波が突発的に明るくなる現象を世界で初めて捉えることにも成功しています。



「時間」というテーマの面白さ

私たちの普段の生活にも深く関係している時間。抽象的な概念ですが、誰もが一度は考え、悩み、理想を描いたことがあるでしょう。多くの人が興味・関心を持つ、多様性にあふれたテーマと言えます。

例えば、宇宙ステーションでは、90分ごとに昼と夜を繰り返すため、「1日」を人工的に作り出さなければいけません。日本人が時間を正確に把握して生活を送るようになったのは、この100年間の出来事です。藤澤所長は「私たちがどのように時間を使っているのか、またどのように時間を使うのが生物としての人間にとって好ましいのかを知ることは重要で、時間学の効用の一つ」と言います。

「時間学」がもたらす豊かな実り

学長だった広中氏の構想から生まれた時間学研究所。藤澤所長は「普通、学問というのはニーズがあって形になるものだが、この研究所はトップダウンで生まれた。時間学というのは実に良い発想で、多くの人をひきつける面白さがある。トップダウンで与えられた時間学は、豊饒な可能性を持っていて、私たちはチャンスをもにしなければならぬ」と強調します。

研究所の特色を生かして

時間学の構築へチャレンジを続ける研究所として、自由に研究ができる環境づくりや風通しの良い組織運営にも配慮しています。文理融合の共同研究に取り組みやすい環境を生かし、時間を鍵として、今後さらに学際的な研究が進むことが期待されます。

藤澤所長は「文系・理系にかかわらない問題に正面から向き合い、研究者が各々の学問論を真剣にぶつけて研究をしている。時間学に携わったことで、学問の世界の広さ、面白さに気づき、学問に対する謙虚さを取り戻すことができた。これからも地道に丹念に研究を続けていきたい」と、この先を見据えています。

